

校内別室に通う生徒のより良い支援の在り方について

学籍番号 249204

氏 名 大西 悠生

主指導教員 柿 慶子

副指導教員 牧 郁子

1. 本実践研究の背景と目的

近年、小・中学校における不登校児童生徒数は増加し続けており、令和6年度は過去最多となっている（文部科学省2025）。不登校の背景には、学校生活への意欲低下や生活リズムの乱れ、不安・抑うつ、学業不振、友人関係の問題など多様な要因が存在する。多くの児童生徒は担任等学校内外の機関から何らかの支援を受けており（文部科学省同）、学校において担任等からの指導・支援を継続的に受けていく方法の1つとして学校内にも学びの場や相談できる場を作っていく必要が高まっている。こうした状況を踏まえて文部科学省(2023)はCOCOLOプランを策定し、学びの場の確保、早期支援体制の構築、安心して学べる学校づくりを推進している。実習校のあるA市においても、学びの多様化学校や教育支援センター、校内教育支援センター等の整備を進め、不登校児童生徒の学びと居場所の保障に取り組んでおり、学校内外が連携した包括的な支援体制の構築が進められている。中川ら（2011）の校内教育支援センター(校内別室以下別室)についての研究では、別室に通う不登校生徒に対して、教室復帰への意識を持った教職員による学習指導を通じた関わりが教室復帰に効果的であり、特に中学校では自習中心よりも教科を含む学習指導を行った場合に効果が認められたとしている。そこで筆者は別室の充実度を高めることで生徒の自己実現に近づけることができるのではないかと考え、生徒の生活・学習を充実したものにするためのより良い支援の在り方を探ることを本研究の目的とした。

2. 基本学校実習Ⅰ・Ⅱにおける実践

基本学校実習Ⅰでは、校内別室における学習支援や授業見学を通して、不登校生徒の実態把握と関係性構築を行い、同時双方向型オンライン授業における参加の難しさや、教科担任との連携不足といった課題を把握した。基本学校実習Ⅱでは、別室に通う生徒や教職員との会話を通して別室利用開始時に生徒が設定する目標が十分に活用されていない点や、教員の人員不足により多様な学習形態の実現が困難である現状が明らかとなった。一方で、生徒の一部が教科によって学級に戻り、前向きに授業へ参加している様子や、他者理解を重視した学校風土が別室生徒と学級とのつながりを支えていることが確認された。

3. 教職員への質問紙調査及びインタビュー調査

発展課題実習Ⅰでは、実習校における別室の支援について教員及び学習支援サポーターを対象とした質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査の結果、教職員の9割以上が別

室の必要性和有効性を認識しており、令和7年度から別室担当教員が配置されたことで、教員間の情報共有や連携が円滑になったことが示された。一方で、オンライン授業準備や別室との連携に伴う負担感を抱く教職員が一定数存在することも明らかとなった。別室での学習活動については、オンライン授業に加え、生徒の実態に応じた個別学習、実習・実技科目、教科担任による対面指導など、多様な学習形態に関する意見が挙げられた。インタビュー調査からは、別室が教室復帰を前提とした一時的な場ではなく、生徒が自分に合った学習や生活を行う居場所として位置づけられていること、また担任は生徒の状況に応じて支援への介入を調整しつつ、教室・別室・保護者をつなぐ役割を担っていくことの必要性等が確認できた。さらに、教員と学習サポーター間の情報共有の課題についても明らかになった。

4. 活動記録シートの実践

質問紙調査及びインタビュー調査の結果を踏まえ、別室に通う生徒が活動の記録や振り返りを記入し、関わっている教員や学習サポーターがコメントを記すという形の活動記録シートを導入した。実践が進むにつれて次第に活動記録シートの記述内容に変化がみられ、形式的な記載よりもその日感じたことや考えたことなど、生徒の率直な感情を表現する記述が増加した。文面をきっかけとした雑談などの会話が弾むようになり、生徒と学習サポーターとの関係形成にも良い影響が見られた。また普段対面での自己主張がほとんどみられない生徒が、大人が様子を見ているだけでは気付かなかったオンライン授業の改善点について活動記録シートの振り返り欄に書いたことで、別室の担当教員・ICT担当の教員・担任が連携して翌日から環境を改善することができた。また、担任が別室での生徒の活動内容や心情を知る機会となり、文面と対面の両方でのコミュニケーションに繋がった。その結果、登校日数や別室での滞在時間が増加した生徒や、教室での生活へと移行した生徒が見られるなど、学校生活の変化も確認された。一方で、担任と学習サポーター間のやり取りには大きな変化がなく、ファイルの受け渡し方法や担任の業務負担に関する課題が残った。

5. 総合考察

本研究では別室において活動記録シートを導入した結果、別室でのコミュニケーションが促進され、不登校傾向のある生徒の登校行動にも変化が認められた。この取組を持続可能なものにするためには、生徒に対して、シートの全ての欄を埋めることを目的とするのではなく、形式に囚われず書ける範囲から記入すればよいことを事前に説明しておくことが重要である。まずは毎日できる範囲のことの継続を重視して「書くこと」に対する抵抗をなくす必要がある。

また、教員や学習サポーター側も活動記録シートのコメントを「業務」と捉えるのではなく、普段生徒と気軽に挨拶をしたり雑談をしたりするような感覚で取り組むことが継続のポイントである。もしコメントを返す時間が確保できない時はシールを貼ったりスタンプを押したり、直接会話のなかで生徒が書いていた内容に触れたりすることが、教員からの「読んだよ」というフィードバックとなり、生徒のモチベーションの低下を防ぐことができると考える。

本実践研究を通して、担任は生徒と関わりたいという思いを持ちながらも業務量の多さや関わる生徒の多さから別室にあまり関わっていないことに対してジレンマを抱えている場合があることが分かった。そのため学校体制としては、別室担当者を軸とした役割分担や担任が無理なく別室に関わるような時間割の工夫により、チームとして連携を図ることが重要である。